

2012 年度 入学 試験 問題

国 語

(試験時間 13:35～15:05 90分)

1. 解答用紙は、記述解答用紙とマーク解答用紙の2種類がありますので注意してください。
2. 解答は、必ず解答欄に記入してください。なお、解答欄以外に書くと無効となりますので注意してください。
3. 解答は、HBの鉛筆またはシャープペンシルを使用し、訂正する場合は、プラスチック製の消しゴムを使用してください。特に、マーク解答用紙には鉛筆のあとや消しくずを残さないでください。また、折りまげたり、汚したりしないでください。記述解答用紙の下敷きにマーク解答用紙を使用することは絶対にさけてください。
4. 解答用紙には、受験番号と氏名を必ず記入してください。
5. マーク解答用紙の受験番号および受験番号のマーク記入は、コンピュータ処理上非常に重要なので、誤記のないよう特に注意してください。

— 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。(25点)

「フィールドワーク」とは、参与観察とよばれる手法を使った調査を代表とするような、調べようとする出来事が起きているその「現場」(＝フィールド)に身をおいて調査を行なう時の作業(＝ワーク)一般をさすと考えていいでしょう。この作業を通して集められるデータの多くは「一次(的)資料」、つまり調査者が自分の目で見、耳で聞き、肌で感じた体験をもとにした資料としての価値を持ちます。誰かが本やその他の文書資料に書いたことをもとにした「二次(的)資料」とは基本的に質の異なる資料です。

フィールドワークという方法は、もっぱら現代社会を研究の対象にする社会学でもよく使われてきました。一般にフィールドワークの「現場」といえば、未開社会あるいは文字を知らない無文字社会とよばれる社会が連想されるでしょうが、実際には未開社会から現代社会にいたるまでさまざまな社会や文化が現場(フィールド)として扱われてきたのです。そして、いまや文明の波が地球全体をおおいつくすようになった時代にあつて、人類学者たちですら、未開の部族社会そのものだけでなく、そういう社会が近代化されていくプロセスを研究したり、あるいは人類学者自身がその中で生活している現代社会を対象としてフィールドワークを行なうようになってきています。この意味でも、フィールドワークの「現場(フィールド)」とは、遠く離れた未開の地に限らず、フィールドワーカーが第一次資料を求めて調査を行なう場所や状況一般をさしていると考えて一向にさしつかえないのです。(中略)

フィールドワークは、図書館の書庫から始まる……こんなことを言ったら、げげんな顔をされるかもしれません。「フィールドワーク」の代表的な訳語の一つは野外調査ですし、他の二つの訳語、現地調査と現場調査の「現地」や「現場」にしても書庫のイメージからはほど遠いものです。それどころか、図書館や書庫というと、フィールドとは正反対のものというイメージの方が強いでしょう。

アメリカの社会学者ロバートHパークは、フィールドワークによる社会調査を学生たちに強くすすめる、シカゴ学派という社会

学者たちによる都市研究の黄金時代を築きあげる上で指導的な役割を果たした人です。パークの「ズボンの尻を實際のそして本
当の調査でよごしてみなさい」という檄^{げき}は、まさにパーク流の「書を捨てよ、町へ出よう」だったともいえます。

たしかに、フィールドワークの醍醐^{(1) だいご}味は、何といつても、まだ誰も活字にしている現実の姿を、まさにそれが起きているそ
の現場に身をおき、自分の目と耳を使って調べ上げて第一次情報として報告することにあります。現実社会の生のリアリティに
くれば図書館の書庫で調べられる人伝^{ひとつ}での第二次情報などいかにも色あせて見えるでしょう。また、そんな中古（セカンド
ハンド）の情報を集めるよりは、一刻も早く現場に飛び込むこそが必要だと思えるかもしれません。

しかし、完全に本を捨て去ることもまた、図書館から一步も出ないような研究と同じくらいにリアリティを見失う危険性を秘
めています。問題は、「本を読むべきか読まざるべきか」というような低次元のものではなく、どういう本をどの時点でどのよ
うに読み、また本で仕入れた情報や物の見方をどのように現場の調査に生かすか、というところにあるのです。これは、今さら
改めて言うほどのこともない、ごく当たり前のようなことのように聞こえるかもしれませんが、こんな単純なことが、
フィールドワークに没頭し、また自分を「調査屋⁽²⁾」と規定して党派的な立場をとるうちに、いつしか忘れられてしまいがちな
のです。

「ホイキタ調査のたとこ面接^{インタビュー}」という言葉があります。これは、まさに、「図書館」を放棄してしまったフィールドワー
カーが自嘲^{じちやうこ}的につぶやく言葉です。彼は、たまたま調査の機会が訪れた時に下調べもロクにしないで「ホイキタ」と現場にと
びこんでしまったのです。ですから、大量の資料を集められたし、大勢の人に「でたとこ勝負」でインタビューすることもでき
たのですが、いざ調査の結果をまとめる段階になってどうやってまとめていか分分らず四苦八苦しているのです。

こんなフィールドワーカーにインタビューされる方こそ、いい迷惑です。すでに本や雑誌に掲載され活字になっているはずな
のに、同じことをもう一回ははじめから話さなければならぬというのは、よほど話し好きの人でもかなり苦痛な体験に違いあり
ません。「○○○は最近どうなっていますかねえ？」「××について、ご感想をうかがいたいです……」……まるで駆け出
しのジャーナリストが言うようなとぼけた質問しかできないようでは、まともな民族誌など書けるはずがありません。大切な

は、調査に入る前にはいる活字情報（最近では電子情報もあります）を活用して十分な下調べをしておくことです。

下調べをしておくべき文献には、大きく分けて二種類のものがあります。一つは、調査対象そのものあるいはそれに関連した事項に関する、資料的な性格の強い文献です。新聞や雑誌、事典、各種データベース、そして各種の報告書や統計資料などがこれにあたります。もう一つ、これらの文献と同じ程度か場合によってはそれ以上に大切な種類の文献があります。それは、情報をどのような観点からどのように解釈したり利用すべきか、について教えてくれる文献です。きれぎれの「情報」は、単なる材料でしかありません。それを自分の手で編集して意味のある「知識」に作りかえていくためには、物事を理解し整理するための枠組みがなければなりません。問題の種類や性格によって、それは社会学や人類学の文献だったり、また時には歴史書であったり哲学書であったりとさまざまですが、良質の専門書は、まさに情報から知識を組み立てる上での枠組みを作るヒントを提供してくれます。そして、これら良質の専門書は、さらに、そもそもなぜその問題が大切なのか、何が自分にとって問題なのか、という問題発見の方法をも教えてくれます。

資料的な文献は、「どういう情報がどういう文献に掲載されているか」に関する情報を収録した索引（インデックス）的な書物を利用すると能率的に探せます。最近では、そのインデックス自体の利用法についてのマニュアルも多数出版されています。また、まだまだ満足なものではないのですが、パソコンやワープロ通信で利用できる各種のオンライン・データベースもありません。

一方、どういう専門書を読んだらいいか、というのとはとても厄介な問題です。誰もまともに答えられる人はいないのではないかとさえ思えるくらい難しい問題です。⑤、かなり以前から学問の枠組み自体がゆらいで混沌こんとんとしており、学問の見取

図を作る事がこれほど難しい時代は無いといってもいいような状況だからです。⑥、一つだけ確実に言えることがあります。

それは、こういう時代にこそ、流行の理論を追いかけるよりは、じっくりと古典に取り組むことの方が価値があるということです。⑦、これは、古典についての注釈や話題になっている古典の新解釈を読め、ということではありません。古

典の原典そのものにあたるべきだ、ということですが、言ひ古されたことではあります。古典には、後の時代の注釈者の手に

よつてもつれてしまった議論の筋道がきわめて明快に整理されています。また、いま流行し脚光を浴びている理論の中では、もつたいぶつた言葉や言い回しで表現されていることが、驚くほど平易な言葉で分かりやすく述べられていることもよくあります。

フィールドワークの場合に限って言えば、自分が調べようと思つている地域や問題と直接関係のない文献であつても、古典や名著といわれている民族誌は、ぜひ読んでおきたいものです。というのも、これらの民族誌は資料的価値だけでなく重要な理論的考察をも含んでいることが多く、この意味で第一のグループの文献と第二のグループの文献の両方の性格をもつた文献だといえるからです。

フィールド調査に入る前に文献をみっちり読んでおけるような余裕があるときには、文献リストを作つておくその後で役に立ちます。これには、少なくとも三つのグループの文献を含めておいた方がいいでしょう。一つは、今言つた色々な分野の学問でよりにどこにされている各種の古典です。古典に加えて読んでおきたい二番目、三番目のグループの文献は、もつと分野を限定した、自分の調べようと思つている問題に近い領域の文献です。少なくとも二つの領域をカバーすることがすすめられます。「少なくとも二つ」というのは、調査しようと思つている問題に関連する文献だけに限定してしまうと、重箱の(8)をつつくような結果に終わつてしまいがちになるからです。そうなると、広い視野がもてなくなるし思いがけない着想も浮かばなくなりません。

文献リストを作る時には、レビュー専門誌や雑誌のレビュー論文などを利用して、まだ読んでいない本もリストアップしておくようにします。これは一種の努力目標です。最初にこういう全体的な地図のようなリストを作つておけば、自分の文献サーベイがどの程度まで進んでいるのが常に把握できますし、フィールドに入つてしまつて文献にあたる時間が無くなつた時にも、文献調査の方がどこまで進んでいたかをいつでもチェックできるという大きな利点があります。こういう地図さえあれば、たとえフィールドに一冊も「書」を持っていけなくても、あるいはまた限られた数の「書」しか持たなくても「野(フィールド)」や「町」に出てまごつく事は少なくなるでしょう。また、いい加減な解釈をする危険も少なくなるはずです。

要するに、書を捨て去る必要はまったく無いのです。見知らぬ地に出かける時に地図が必要なように、フィールドワークに
 りかかる時には、書はひとまずどこかに置いて、その代わりに文献リストという地図を自分の手で作り、それを常に参考にする
 必要があるのです。

(佐藤郁哉『フィールドワーク』による)

〔問一〕 傍線(1)にいう「醍醐味」と傍線(3)にいう「駆け出し」と同じ意味の語をそれぞれA-Eの中から選び、符号で答えなさい。

(1)				
E	D	C	B	A
難しさ	面白さ	必然性	原点	偉業

(3)				
E	D	C	B	A
せつかち	成熟	使い走り	鮮烈	新米

〔問二〕 傍線(2)にいう「調査屋」と同じ意味の表現を本文中より抜き出し、二十五字以内で答えなさい。(句読点、引用符も一字に数える)

〔問三〕 傍線(4)にいう「良質の専門書」に関して、本文の筆者の考え方と合致しているものはA、合致していないものはBの符

号で答えなさい。

ア 資料的価値だけではなく重要な理論的考察を含んでいる。

イ 第二次情報をわかりやすく整理し、正確に記述している。

ウ 大切な問題がどこにあるのかを見つける方法を教えてくれる。

エ 議論の筋道が明確に整理され、平易な言葉で理論を説明している。

オ 自分の目で見、耳で聞き、肌で感じた体験を記述している。

〔問四〕 空欄(5)(6)(7)に入るもつとも適当な語をそれぞれA～Eの中から選び、符号で答えなさい。

(5)

A	したがって
B	そのうえ
C	というのも
D	さて
E	にもかかわらず

(6)

A	なお
B	くわえて
C	しかし
D	したがって
E	また

(7)

A	したがって
B	しかも
C	そこで
D	あるいは
E	もちろん

〔問五〕 空欄(8)に入るもつとも適当な語を漢字一字で答えなさい。(楷書で正確に書くこと)

〔問六〕 次のア～オのうち、本文の筆者の考え方と合致しているものはA、合致していないものはBの符号で答えなさい。

ア 一刻も早く現場に飛び込み生の経験を数多く積んで、現実の姿を活字にすることが重要である。

イ 物事を理解し整理するための枠組みや調査結果のまとめ方は、フィールドワークを通して学ぶことができる。

ウ 調査したい問題に関する文献しか読まないと、広い視野が持てなくなり、思いがけない着想も浮かばない。

エ フィールドワークの現場に行くときは、文献リストという自作の地図を持っていく必要がある。

オ 本を読むべきか読まざるべきかを考えながら、フィールドワークをしなくてはならない。

二 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。(25点)

中世以前にまで遡ると、現代とは大変に異なる使われ方をしていた言葉の代表的な例として、「自由」「自然」「支配」の三つの言葉をとりあげてお話ししたいと思います。これらは、いずれも中世の文書を読み解いていく上で最も誤りを犯しやすく、そのため大学院の試験問題などにもよく出題される言葉です。本気で中世を勉強してきた人は絶対に間違いませんが、言葉を軽視してきた人は致命的な誤りを犯してしまうのです。しかし逆に言えば、それが使われていたときの言葉の意味を正確にとらえながら中世の文書を読み解いていくと、予期しない世界が開けてくることがあるわけで、そこに「(1)」という学問の面白味があるとも言えると思います。

「自由」については、これまでも様々な議論が行われてきています。我々が現在使っている「自由」は通常、フリーダムあるいはリベティの翻訳語と理解されています。しかし、この言葉自体は実は非常に古くから存在しており、しかも現在の意味とは全く異なる用いられ方をしていたのです。

この言葉に関する論文は津田左右吉氏の「自由といふ語の用例」(岩波書店『津田左右吉全集』第二十一巻所収)、新城美恵子氏の「自由」の語義の変遷にみる思想的意義」(『法政史学』二十五号、一九七三年、同氏著『本山派修験と熊野先達』岩田書院、一九九九年)などがありますし、柳文章氏の『翻訳語成立事情』(岩波新書、一九八二年)という本には、英語の freedom, libertyあるいはオランダ語の vrijheid (フライハイト) の翻訳語として「自由」が使われ定着していく経緯とその問題点について詳しく言及されています。

また、佐藤進一氏の『(新版)古文書学入門』(法政大学出版局、一九九七年)は中世の古文書に現れる用語が広範に解説されており、中世あるいは前近代の社会を理解するための多くの手掛かりを与えてくれる優れた本ですが、その中で「自由」は「わがまま勝手の意。慣習、先例、法令など秩序を形づくっているものに逆らい、乱そうとする行為はすべて『自由の……』として非難された」と解説されています。

このように、「自由」は中国大陸から入ってきた言葉ですが、元来は専恣せんしオウボウ(3)な振る舞いをするという語義で、専らマイナスの価値を示す言葉だったので。中世の『二条河原の落書』で用いられた「自由狼藉ろうぜきの世界」などの表現は、そのことを端的に物語っていると云えます。

それが(4)のは、鎌倉時代に禅宗が日本に広まってからのことのようにです。禅宗の世界では、思うままになる、「制約を受けないなど、多少なりともプラスの評価を含む言葉として「自由」の語が使われていました。実際、十六世紀に入ると、「自由」に対する否定形として「不自由」という言葉が文書の中に現れます。「自由」がマイナスの評価のみの言葉であるならば、「不自由」という言葉が生まれるはずはありませんから、「不自由」の語の登場は「自由」が積極的なプラス価値を持つ語として用いられたはじめたことを示していると言つてよいと思います。そして、江戸時代にはそうした禅宗系の用語としてのプラス価値の「自由」と、わがまま勝手の意のマイナス評価の「自由」の語が並行して使われていました（阿部謹也・石井進・樺山紘一・網野『中世の風景』(下) 中公新書 一九八一年)。

明治になって、福沢諭吉は『西洋事情』の中で、フリーダム、リバティを「自由」と訳していますが、その際にも「原語の意味は、日本語の我儘わがまま放盪ほうたうで、国法をもおそれぬという意義の語ではない」とわざわざ断つています。福沢はフリーダム、リバティの訳語として「自由」は必ずしも適切ではないと考えつつも、民衆の日常語となっていた「自由」を用いたのであると、柳父氏は『翻訳語成立事情』の中で指摘しています。

その頃には、「自由」以外にも「自在」「自主」「不羈ふき」など様々な訳語が用いられましたが、結局いずれも定着はしませんでした。柳父氏は「私たちの持ち合わせのことば、日本語で、この西歐語を翻訳するのは、いかにむずかしかったか」と書いていますが、まさしくその通りだったのだらうと思います。西歐の「自由」と全く同じ意味の言葉は、日本には存在しなかつたとすら言えるのではないのでしょうか。

かつて私は『無縁・公界・楽』(一九七八年、後に平凡社ライブラリー、一九九六年)という本の中で、日本の中世における「自由」を表現する言葉として、「無縁」という語があるのではないかと考えてみたことがあります。中世には、「無縁所」と呼

ばれる寺が全国各地に見られましたが、この寺は世俗の縁の切れた寺で、そこに入ると俗世間の婚姻関係や貸借関係が断ち切られる西欧の「アジュール」と比較しうる寺院と考えられます。そこで、「無縁」という言葉自体について考えてみたのがこの本ですが、「無縁」の語感のためか、この本は本屋さんで葬式に關する本の棚に並べられたりもしたのでそうです。しかし私は本気で「無縁」という言葉には、世の中のさまざまな世俗的な関係をすべて断ち切った「自由」という意味が含まれていると考えています。それは西欧の「自由」と近似したところのある言葉だったことは間違いないと、いまも思っています。

もちろん、そうだといいてもフリーダムの訳語として直ちに「無縁」を用いるわけにはいきませんし、ここまで定着した翻訳語としての「自由」を変更することなど不可能ですが、この言葉を使う上で考え直すべき余地がまだに残っていることは否定できません。現在は「自由主義」のように、「自由」は基本的にプラスの価値を持つ言葉と考えられています。それでもなお、勝手気儘きまごころというマイナスの語感がつきまとい、**「自由主義」**が否定的な文脈で使われる場合も少なくないことは事実です。これは日本の社会の中での「自由」の語の本来持っていた意味が **(5)** からにほかなりませんが、「自由」が非常に基本的な言葉であるだけに、日本の社会の中での意味を十分認識した上で、使う必要があると思います。

「自然」という言葉には古くから、「しぜん」と「じねん」の二通りの読み方がありました。これも文書を読む場合に注意が必要とされる言葉の一つです。「しぜん」と読む場合を挙げると、例えば「自然上野佐渡守恣そ之儀雖申之」（自然、上野佐渡守ほしいままの儀、これを申すといへども）という文章が、ある文書の中に出てきます。この「自然」を現在われわれが使っている通りに「おのずから」と訳し、「おのずから上野佐渡守が勝手なことを言っても」では、全く意味が通らないのです。

この場合にはむしろ逆に、「もしも、万が一」の意味で用いられており、「万一、上野佐渡守が勝手なことを言ったとしても」と訳すべきなのです。そして、中世の文書の中ではこの意味で使われているケースが圧倒的に多いと思います（前掲、佐藤氏『新版』古文書学入門）。岩波書店の『古語辞典』では、「人力で左右できない事態を表わして」「万一のこと。不慮のこと」の意味が生じ、副詞として「万一。ひょっとして」の意で用いられたと説明されていますが、まったくその通りだと思えます。

ところが、「じねん」と読む場合には、「おのずからそうであること」という現在の意味に近い語として用いられています。で

すから、いずれの意味で用いられているかを古文書の文脈の中で判定することは、実はなかなかむずかしいのですが、中世文書の場合、「自然」は「もしも、万が一」と訳した方が間違いは少ないと思います。

「自然」がそのような「おのずから」という意味を一面で持っていたことを考慮に入れると、英語のネイチャーの翻訳語として「自然」が使われたのは、不適切ではなかったと考えることもできます。しかし、現在の「自然」という語から、「万が一、もしも」という意味が(6) ことも間違いない事実です。このように、欧米の言葉を翻訳する際、それに対応させたがゆえに、かつて日本の社会の中に存在した言葉の多様な意味が(6) 場合が実際に少なからずあるのです。日本語の持つ豊かさを理解するために、このことをわれわれは十分に考えておく必要があるのではないのでしょうか。

さらに「支配」も、やはり中世においては現代とは全く異なる意味で用いられていました。例えば、中世文書の中では「用途」を近国御家人に支配せらるる所」などの文脈で出てきます。これを、「近国の御家人を抑えつけて支配する」と理解したのでは、全く意味を把握できません。「用途」は費用のことで、この場合の「支配」は費用を近国の御家人に「割り当てる」「配分する」という意味で使われているのです。これは「支配」の「配」の意味が強調された使い方であるとも言えるでしょう。

また、中世文書の様式の一つとして「支配状」という名称をつけられた文書があります。現在の「支配」の語感からすると、領地などを支配するための文書などと考えてしまうでしょうが、実際には、例えばある莊園を複数の僧侶（せうりよ）たちが共同で管理している場合に、入ってきた年貢を、これらの人々の間にどのように配分したかを記した文書が「支配状」なのです。これはむしろ「配分状」と呼んだ方が現代人にはわかりやすい内容ですが、「支配」は本来、そのような使われ方をしてきた言葉でした。つまり、本来は支配・被支配のような上下関係あるいはトウチ(7)関係とはあまり関わりのない言葉だったのです。いつ頃から変化して現在ののような意味になっていったのか、実は私も不勉強で明確にはわかっていません。しかし近代に入ってドイツ語のヘルシャフトの翻訳として「支配」が用いられてからは、(8) ものと思われま

それにしても、現在の「支配」の意味の背景にも、「配分する、割り当てる」という意味があることは間違いないと思います。現代の意味で、人を支配することは、物や金などの配分を特定の人間が掌握し、それによって他者を束縛することと考えること

ができます。これは、言葉が歴史の歩みの中で (9) 好例とも言えるでしょう。

このように、現在の言葉、特に学術用語には翻訳語が多く、われわれは欧米の言葉との関連でその意味を理解している言葉が少なくありません。明治時代に外国語が入ってきた時に、日本語のサイライの言葉と欧米の言葉とをすり合わせて理解することは、たしかに非常に難しい作業だったと思います。例えば、柳父さんが書いていますが、ソサエティに対応する言葉は日本語の語彙にはありませんでした。そして当初は「会社」などと訳され、それがやがて「社会」と言い換えられて定着していったといわれています。

商業用語に関連して、当時の学者たちは、西欧の哲学や経済学の理論を理解するためにはサイライの用語では不十分と考え、それまでの言葉を変えながら翻訳語を作りだしていったのです。そのために大変な苦勞をしたことは間違いないと思いますが、こうして作られた翻訳語が、やがて日本語の中に深く定着していきました。

そして、それらの言葉によって、われわれが西欧の学問や思想を理解することが容易になったことは間違いありませんし、これらの翻訳語が普遍性を持ち、アジアの諸国に影響を及ぼしたことも事実だと思います。しかし、いま振り返ってみると、こうした翻訳語によって西欧の思想や学問の背後にある社会のあり方まで、われわれが本当に十分に理解できたのかどうかは、イゼンとして大きな問題として残っているように思います。

また一方、翻訳語によって生活が成り立っているような状況が生まれたために、日本語の本来の豊かさを、われわれ自身が見失ってしまった一面のあることも否定できないと思います。今までいろいろな言葉についてお話ししてきましたが、日本語の豊かさを見直し、それを通じてより正確に日本の社会を理解するために、この拙い話が多少でもお役に立つことができれば幸いです。

(網野善彦『歴史を考えるヒント』による)

注 アジール……困窮者などのための避難所

〔問一〕 傍線(3)(7)(10)のカタカナを漢字に改め楷書で正確に書きなさい。

- (3) オウボウ (7) トウチ (10) ザイライ (11) イゼン

〔問二〕 空欄(1)に入るもつとも適当な語を本文中より抜き出し、漢字二字で答えなさい。(楷書で正確に書くこと)

〔問三〕 傍線(2)の意味として、筆者がふさわしいと考えているのはどのような状態か。次の文の空欄にあてはまる表現を本文中

より抜き出し、二十五字以内で答えなさい。(句読点、引用符も一字に数える)

筆者はフリーダムあるいはリパティの意味を

状態と考えている。

〔問四〕

空欄(4)(5)(6)(8)(9)に入るもつとも適当な語句をそれぞれA、B、Cの中から選び、符号で答えなさい。

- (4)
- A 違った意味で用いられはじめた
 - B さらに徹底して用いられた
 - C 現代用語と同じ意味に変化する

- (5)
- A 変化してしまった
 - B すでに失われている
 - C いまも生きつづけている

- (6)
- A 生まれ変わった
 - B 変質をとげた
 - C 消えてしまった

- (8)
- A 原義とは逆の意味で使われはじめた
 - B 本来の使われ方が生かされていった
 - C 完全に現在の意味に定着していった

- (9)
- A 意味を発展させつつ変わっていった
 - B 翻訳されても原義は変わらなかった
 - C 本来の意味をとりもどしていった

〔問五〕

次のア、イ、オのうち、本文の筆者の考え方と合致しているものはA、合致していないものはBの符号で答えなさい。

- ア 中国起源の熟語はプラスの価値を表すものとマイナスの価値を表すものに分けられる。
- イ 一つの熟語でも、読み方により異なる意味をもつ日本語があった。
- ウ 現在使われている熟語からはすぐに想像できない意味をもつ日本語があった。
- エ 明治時代に作られた翻訳語によって西欧社会を正確に理解できるようになった。
- オ 日本語のもつ豊かさを理解すれば、現代語の限界について考え直すことができる。

三 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。(25点)

二〇〇一年九月一日、アメリカ東海岸への同時テロ事件が起こり、崩れ落ちるツイン・タワーの映像が世界中で繰り返し放送された。この事態をきっかけに露出したのは、一般の人々の間にたゞようある種の不安感である。これは、単に戦争やテロリズムに巻き込まれたらどうしようという不安であろうか。もしそうなら、それは一過性のものであり、(1) 忘れるのたゞえ通りに、大規模なテロの記憶が薄れるにつれて、日常性が回復されていくことであろう。しかし、そう簡単に事は収まりそうにない。今回、人々は、一瞬にせよ深淵しんえんを覗き込んだからである。これまで前提とされていたことの多くが、実は必然でも何でもなく、偶然の上にあることを知ってしまった。もう元には戻れない。このことは、さまざまなレヴェルで言えるが、ここでは政治の組み換えに注目したい。人々が当然と見なしてきた政治的枠組みが、もはやその自明性を失いつつある。政治の意味そのものが変わりがねないのである。

政治とは何かについては、もちろんいろいろな考え方があがるが、近代の政治は、境界線によって支えられてきた。地面の上にヴァーチャルな線を引いて、ある領土(テリトリー)を囲い込む。こうした空間的な囲い込みは、単に物理的に空間の利用を限定するにとどまらず、その空間内で起こる出来事についての最終的な決定単位としての主権の観念と結びついてきた。領土を持つ(テリトリアル)国家が、その領土内のすべての事柄について、管轄するものとされたのである。領土内の事柄について、境界線の外部から口を出すことはできないし、境界線の内部に、国家に対抗できる勢力もないというのが、主権の意味である。そして、こうした主権国家が境界線を接してひしめき合うことによって、一種のモザイク状態が生まれ、それによって、管轄されない事柄、決定権力の及ばない領域などはなくなるものと想定されていた。これが、地球を国家(ステート)によって管理するという枠組みにほかならない。

こうした空間的な囲い込みに伴い、もう一つの囲い込みもまた進行した。人間の群れの囲い込みである。特定の人々を国民(ネーション)として囲い込み、それらの人々の運命に特別の関心を寄せることが一般的になった。境界線の内部の群れが大き

くなり、より健康になり、より豊かになることが国益（ナショナル・インタレスト）とされる。そして、国家は国益の守護者としてふるまうというのが、国家理性の観念である。国家理性は、普遍主義的な配慮につながるものではない。むしろそれは、境界線の内部からさまざまな問題やリスクを外部に排出することによって、内部の最適化を図るものである。その意味で、国家理性は本来的に (2) である。政治の目的を、「人が人に対して狼である」自然状態からの離脱に見出したホップズこそは、近代の政治的な枠組みを最も鮮明に示した人物である。しかし、ある境界線の内部から自然状態を排除することは、境界線の外側との間に自然状態を生み出すことと引き換えであった。国内政治と国際政治は、こうして表裏一体のものとして成立する。

しかしながら、そのように境界線によって内側と外側を区別し、国内政治と国際政治を区別するという手法自体が、今回の事態によって問われることになった。何らかの閉じた全体性（トータリティ）が成り立つとは信じられなくなったのである。境界線はほころんでいるのではないか。そして、内側にいると思っていたらいつの間にか外側にいて、外側のはずが内側になるという状況になっているのではないだろうか。

まず、リスクを「国境線で食い止める」ことができないのではないかと不安が生じている。かつては水際⁽³⁾で守っていれば、外国からの攻撃は内側には来ないとされてきた。たとえ国境線が侵犯されても、従来の戦争なら、敵が首都に到達するまでには時間があつた。空間的な距離が、心理的な安全感覚と運動していたのである。ところが、一連のテロ事件によって、国境線の内側で突然戦闘行為が起こりうることが明らかになった。世界的な覇権国家の中心部がいきなり攻撃されるという事態は、幾重にも緩衝地帯を設ければ内側を守ることができるという確信をうち砕いたのである。さらに、例えば郵便のような日常的な制度が大きなリスクを運びうることも判明した。これは、コンピュータ・ウィルスを用いたサイバー・テロなどと共に、ネットワークでつながった現代社会が、何らかの障壁によって守れないという印象を強めるだろう。

こうした外部に対する不安感、さらにもう一つの、内部的な不安感と連動する。すなわち、国境の内部に (5) 性があるという事実を、多くの人々が不安材料として意識し始めたのである。国家理性は、国民という群れが、基本的に同質的なものであると信じさせようとしてきた。実際には、どんな国民集団も、最初からさまざまな差異を内部に含んでいたのだが、国民国

家は、教育を通じて公用語を強制し、国民文化を確立することなどによって、同質性をつくり出したのである。そして、ひとたび一定の同質性が形成されると、それはずっと以前から存在していたかのように考えられる。こうした国民の同質性は、人々が共存していくための不可欠の条件ではないにもかかわらず、まるでそうであるかのような考え方が力を持っている。さまざまな人々が一緒に暮らしていることは、それ自体として困ったことでも異常なことでもない。しかるに、ある人々によれば、少数民族や移民集団の存在こそが、リスクを増大させるケンキョウ⁽⁶⁾なのである。テロリズムは実際には「われわれ」全てにとつての問題であり、決して特定の集団だけのものではない。オウム真理教のような集団が、いわゆる先進国の、しかも高学歴の人々の中から出て来たことを想起すれば、それは明らかである。しかし、今回のような事件が起こると、「われわれはこんなことはしない。こんなことをするのは彼らだけだ」と、誰かを悪の根源と見なすような考え方が広まる。

こうして、漠たる不安感を背景に、不安をぬぐうための「セキュリティ(安全)の政治」とも言うべきものが前面に出て来る。そこではまず、最近のこの国に見られるように、軍事がにわかに脚光を浴びる。軍隊を派遣して戦争することが、テロ対策として常に有効かどうかはなほだ疑わしい。にもかかわらず戦争が注目されるのはなぜか。それは、戦争が境界線をつくり出すものだからである。戦争は、敵味方がはっきりしていなければできない。誰を守るべきであり、誰を殺してもよいのかがあいまいなところでは、軍隊が動くことはできない。したがって、戦争をするためには、境界線を明確にせざるをえないわけである。逆に、境界線があいまいな時には、軍事的な論理を持ち出すことによって、境界線を確立することができる。境界線の再確認をしたいがために危機を演出する人々さえ出てきかねないのである。

同時に、国境線の内部から「他者」を排除することによって、国境線を内側から回復するという論理もあらわれる。ある種の民族、ある種の宗教の信者、ある種の思想を持つ人々を、「潜在的なテロリスト」と決めつけて排除したり、どこかに収容して規律化したりする。そのことによって、内部の同質性を確保し、セキュリティを確保しようとするわけである。電話や電子メールなどの盗聴、あるいは「個人情報管理」という名の情報統制が、すでに行われつつあるのである。

境界線を守って内部を最適化しようとしているのは誰か。こうした政治が、単に一部の「権力者」の陰謀にとどまらず、国民

のかなりの部分によって支持されうるということを意識する必要がある。境界線の政治が支持されてきたのは、生活を守りたいという人々の欲求にそれが合致していたからである。抽象的な理念の実現のために、人々が常に動くとは限らない。しかし、安心して生活できるようにしてほしい、それには多少の権利制限や治安強化はカンジユする⁽⁷⁾という「草の根のセキュリティ要求」は、今後身近なところで事件が起きたりすれば、急速に強まりかねないのである。

われわれは、これとは別の考え方を、どこまで示せるだろうか。一つには、セキュリティ要求が、自己破壊的、あるいは自己否定的な側面を持っていることを明確にすべきである。治安対策は、一般の人々には影響しないという考え方が根強い。きわめて(5)な「悪い」連中が排除されるだけだとタカをくくくる人が多い。しかし実際には、ある人々が排除されても安心することはできず、今度は残された群れの中から別の人々が排除される。こうして、結局、最後の一人が消滅するまで、社会の中からリスクをゼロにすることはできないのである。こういう蕭清の循環が始まったらどうなるのか。実際それに近いことはこれまでも起こりかけたし、決して絵空事ではない。テロを「根絶する」という言葉が含む(8)を意識すべきである。

もう一つ言わなければならないのは、境界線の回復という目的が、そもそも実現不可能であることである。経済的、文化的な結びつきや、人の往来などがますます増える中で、「外からの影響を入れない」、あるいは「他者と接触しないように立てこもる」ことは、とうてい無理である。もはや、どんな政府といえども、重要な事柄について、国境の外部との相談や交渉なしに勝手に決めることはできないし、許されない。例えば、主権国家が、主権があるからといって、自分たちの国民経済を排他的に管理することなどできるだろうか。中央銀行が何を言おうと、外部に開かれている市場はそれに従うとは限らない。経済の規模は、すでに一国の財政・金融政策が管理できる範囲を越えているのである。文化政策についても同じことが言える。国民という単位が前提としてきた、国民の文化的な同質性もはや限定的なものでしかない。文化は国境を越えて流通しつつあり、それを制約しようとするあらゆる試みは失敗せざるをえない。

要するに、現在の状況は、国内政治と国際政治の間の境界線が維持できなくなつて、ややカール・シュミットのな表現をすれば、「内政の外政化」と「外政の内政化」が同時進行しているのである。この事態をどうとらえるか、その認識の仕方が大きな

分かれ目になるような気がしている。

(杉田敦『境界線の政治学』による)

注 ヴァーチャル……仮想的 ホブズ……十七世紀イギリスの政治思想家

カール・シュミット……二十世紀ドイツの法学者、政治学者

〔問一〕 傍線(3)(4)の漢字の読みをひらがなで書きなさい。また、傍線(6)(7)のカタカナを漢字に改め楷書で正確に書きなさい。

- (3) 水際 (4) 緩衝 (6) ゲンキョウ (7) カンジュ

〔問二〕 空欄(1)に適切な語句を入れ、「一過性」を表すことわざを完成させなさい。

〔問三〕 空欄(2)(8)に入るもつとも適切な語をそれぞれA～Eの中から選び、符号で答えなさい。

(2)				
E	D	C	B	A
偏狭	絶対	正統	頑強	寛容
(8)				
E	D	C	B	A
リアリティ	テロリズム	セキュリティ	ネットワーク	トータリティ

〔問四〕 空欄(5)に入るもつとも適切な語を漢字二字で答えなさい。(楷書で正確に書くこと)

(問五) 次のア～オのうち、本文の筆者の考え方と合致しているものはA、合致していないものはBの符号で答えなさい。

- ア 歴史的に同じ文化を共有してきた地域が国民国家となった。
- イ 現代社会では国家内部の同質性を維持することは不可能である。
- ウ 国境線を守っていれば安全は確保できるといふ時代は終わった。
- エ 境界線を取り払えば世界における文化と経済の交流が推進される。
- オ 国民の側からセキュリティを追求することで、安全が確保される。

四 次の文章を読んで、後の間に答えなさい。(25点)

ムラは居住の場であると同時に、生業の場でもありました。ムラはすでに生業の場としての顔を喪失していますが、あるいは居住の場という顔もまた揺らぎのなかにあるのかもしれませんが。(中略)

山形県のある山村での体験です。戸数が四戸という小さなムラでした。そこでは、ゼンマイを干していたおばあちゃんから聞き書きをさせてもらいました。話がひと段落したところで、わたしが隣りの家について尋ねると、「あの家にはだれも住んでいないよ」という答えが返ってきたのです。より正確には、土日になると戻ってきて田畑の仕事をしているが、平日は町場の家に暮らしているということでした。そこもまた、典型的な山村だったのです。しかし、ここでは平日の家／土日の家が分かれています。平日は町の家で暮らし、サラリーマンとして収入を得ています。土日だけムラの家に戻って田畑を耕しているのです。そうした暮らしのかたちがありふれた現実になろうとしています。だから、ムラの祭りさえ、神社に集まって酒を飲んで親睦を深めているのであり、それはまったく都市近郊のニュータウンのバザーや盆踊りの風景と変わらないのです。

そうした聞き書きの旅のなかでソウグウしたいくつかの風景を反芻しながら、ふと気がつくと、定住の時代がいま黄昏を迎えようとしているのかもしれない、というモウソウめいたイメージに囚われていたのです。定住と移動、あるいは定住と漂泊といった二元論が、民俗学の周辺でもしばしば語られてきました。わたし自身も大きな思考の枠組みとして、定住と漂泊という二元論をたいせつな拠りどころにしてきたところがあります。しかし、時代の凄まじい移ろいのなかでは、たとえばムラに定住を、都市に移動や漂泊をふり分ける知の作法そのものがむずかしくなっている、リアリティを失いつつあるのかもしれませんが。もはや、ムラのほうが定住中心主義の呪縛をすり抜けて、さだめなき漂流を開始しているのです。しかも都市はそれに気づかずにはいません。そうした現実はなかなか語られないのです。風景としては、まだそこにムラがある、山村がある、漁村があるということ、わたしたちの眼はあきらかに曇らされているのです。

何年か前に、鹿児島の上野原遺跡という縄文遺跡を訪ねました。いまから九千五百年前の、日本列島でもっとも古い定住の

跡が確認された遺跡として知られています。この列島では、すくなくとも一万年近くにわたって定住的な暮らしのスタイルが営まれてきたということでしょうか。⁽³⁾ シュリヨウ・漁撈^{ぎょらう}そして採集にもとづく縄文人の暮らしは、定住生活によって維持されていたのです。この日本列島では、定住の時代がおよそ一万年にわたって続いてきたといえるでしょう。それはときに定住革命とも呼ばれています。しかも、注目すべきことには、そうした定住革命は日本列島のみならず、ユーラシア大陸の各地でほぼ一万年前にいつせいにはじまったらしいのです。縄文の定住革命はそれゆえ、より巨^{おお}きな人類史における定住革命のローカルな表われにすぎなかったということです。

ひとつの世代を二十年として数えれば、一万年というのはわずかに五百世代なんです。そのあいだに、日本列島に暮らし始めた人びとは定住革命によって、移動や漂泊から定住へと暮らしの基本的なスタイルを変えました。それから二千数百年前には、水田稲作農耕が列島に伝わり、農業革命がはじまりました。やがて富が蓄積され、都市が生まれ、小さなクニを支配する王たちが、争いをくりかえし、ついに古代国家の誕生へと展開していきました。産業革命はヨーロッパでは数百年前にはじまりましたが、それはしだいに地球規模に^{びろ}広がっていき、現代の暮らしへと直結しています。わたしたちはさらに、この十年か二十年のあいだに、情報革命というもうひとつの巨きな革命を体験しています。

I

ここからは、定住にたいして移動や漂泊ではなく、遊動という言葉を使いたいと思います。聞き慣れない言葉かとは思いますが、なかなかふくらみのあるチームではあります。「遊び」という日本語には、じつに多様な意味が含まれています。遊部^{あそびぶ}は古代には、死者の葬送儀礼にしたがう人びとを指していました。かれらは音楽や芸能のにない手でもありました。あるいは、遊女^{あそびめ}は春をひさぐばかりではなく、宗教や芸能にも携わる人びとでした。遊びはつねに、歌舞音曲を奏することを第一義としていたのです。そうした「遊」と「動」を組み合わせた遊動という言葉には、日本文化史にとっても豊穡^{ほうじやく}なる意味合いが孕^{はら}まれていると感^{かん}じています。

遊動とは何か。その機能とか役割については、西田正規さんの『定住革命』（新曜社、講談社学術文庫版）では『人類史のなか

の定住革命⁽²⁾が詳しく論じています。西田さんはそこで、遊動のもつさまざまな側面を明らかにしています。

まず、遊動は安定性や快適性をたもつために必要とされます。雨風や洪水を避け、暑さ・寒さを逃れて、つねに天候条件のいいところへとキャンプ地を移します。キャンプ地のまわりにゴミや排泄物^{はいせつぶつ}が堆積^{たいせき}してくれば、キャンプを畳んで移動することでしよう。何年かして戻ってくると、すべて有機物ですから分解して土に戻っています。遊動はきわめて合理的にゴミや排泄物を処理するシステムでもありました。

また、食料や水を得るために有利な土地へと移動します。交易のために、またシユリヨウ⁽³⁾のために人びとは移動をくりかえしました。集団のメンバー間にトラブルが発生すれば、その解決のためにキャンプ地を移動することがあります。ほかの集団とのあいだに緊張関係が生まれたときには、そこに留まる必要はなく、争いが激しくなる前に移動することでしょう。儀礼や祭りや行事をするためにも、人びとは移動の旅をくりかえしています。あるいは、ひとところに定着していると空気が淀^{たま}んで、トラブルのもとになることがあります。そこで、肉体的・心理的にやわらかな負荷を求めて移動を選び取ります。それから、観念的にも物理的にも、死体や死のケガレから逃れるということがあります。伝染病などの蔓延^{まんえん}を避けるためにも移動が必要となったでしょう。

遊動を基調とする社会では、避ける・逃げる・去るといったことを規範的なモラルとしていたのかもしれない。それは離合集散型であり、構造的にはとてもやわらかい社会でした。争いや殺し合いを避けるために、おそらく緊張が高まったときには群れをほどいて、去る・逃げるといった⁽⁴⁾ホウサクを取ったのです。遊動から定住へと移りゆき、定住型の社会が出現したときには、まったく異なった集団の原理やトラブルの処理法が求められたことでしょう。

定住的な暮らしは思いがけず厄介なものです。あるところに定住のムラを作れば、ただちにゴミ捨て場やトイレが必要となります。ゴミや排泄物との深刻な戦いがはじまるのです。もはや、次々に起こるはずのトラブルを前にして、離合集散型の対処は許されません。厳しい掟^{おきて}が作られ、違反者への制裁に工夫が凝らされ、さらに村八分や追放など、秩序維持のための最終的な手段が考え出されることでしょう。争いごとの調停を役割とする者が現われますが、それはいつしか権力の源泉となっていくたは

ずです。死体や死のケガレとの宿命的な戦いははじまり、人びとは墓地を造り、死者の鎮魂・クヨウのために祭りなどの仕掛けを凝らすことでしよう。たとえば縄文時代中期の典型的なムラは、中心に広場があって、そこに共同墓地が営まれています。そのまわりに竪穴式住居たてあなを造って、人びとは生活していました。ムラの中心に死者を葬り、祭りをおこない、おそらくは葬送儀礼を丁寧に営んだのです。祖先の観念も生まれたことでしよう。さらに、災いから逃れる、伝染病を避けるときには、定住するエリアのはずれの境界あたりで、⁽⁶⁾道切りや結界封じの呪術じゅじゆつや祭りがおこなわれるようになります。

人類はいまからおよそ一万年前に、遊動から定住へと大きな生活スタイルの転換をおこないました。それが「定住革命」です。そのとき、人類はゴミや排泄物、死体との共存ということ避けがたいテーマとして抱え込みました。テリトリーをめぐる境界争いが起こります。ムラの内と外を峻別しゅんべつする、よそ者や異端、タブーに従わない者や契約に違反する者を排斥する、そのため掟や法を整えねばなりません。そして、人間関係にまつわるトラブルや争いの処理にあたっては、群れを解体するのではなく、あくまで群れや共同体を存続・維持しながらの調停に取り組まねばならないのです。それらはみな、現代においても社会を維持するための仕掛けとして慣れ親しんだものです。いまなお、定住革命以後が続いているのです。おそらく、遊動から定住へと人類が生存の様式を転換させたときには、農業革命や産業革命よりもはるかに巨大な変容が起こったにちがいない、そう、わたしは想像をたくましくしています。

そして、いま、わたしたちは一万年の定住の時代の黄昏を迎えようとしているのかもしれないかもしれません。あらゆる場面で、確実に定住的な思考が揺らぎはじめています。定住中心の思考ではとらえきれない現実がさまざまに生まれています。もはや古典的な二元図式としての定住／遊動の対抗関係を、自明の前提とすることはむずかしいのです。定住中心主義が根底から崩れてゆく、すくなくとも多様化してゆく現実の前には、あらたな遊動の時代の訪れという予感を斥けるしりぞことはできません。なにか、未知なる地殻変動が起こっているのです。その予感だけは拭ぬぐうことができないのです。

(赤坂憲雄『婆のいざない』による)

〔問一〕 傍線(1)(2)(3)(4)(5)のカタカナを漢字に改め楷書で正確に書きなさい。

- (1) ソウグウ (2) モウソウ (3) シュリョウ (4) ホウサク (5) クヨウ

〔問二〕 空欄 I には次の四つの文章からなる一つの段落が入る。それらを意味が通るように並べかえて、ア～エの符号

で答えなさい。

ア 現代の失われてゆくムラを聞き書きのために歩きながら、そこでは農業革命の終わり、定住革命の黄昏とが重なり合って進行していると感じてきました。

イ しかし、もしかしたら一万年ほど前に起こった定住革命のほうが深刻なできごとだったのかもしれませんが。

ウ それにしても、わたしたちは日本文化について語るときに、たいてい稲作農耕のはじまりこそが決定的であったということを無意識の前提にしています。

エ もはやそこには、昔ながらの意味合いでの定住的な暮らしや生業の風景が消えかかっている、それを幾度となく確認してきたからです。

〔問三〕 本文の筆者は遊動型社会と定住型社会をどのように描いているか。遊動型社会の描写としてもっとも適当な語群をア

のA～Eの中から、定住型社会の描写としてもっとも適当な語群をイのA～Eの中からそれぞれ選び、符号で答えなさい。

ア				
A	近代性、	利便性、	公共性	
B	快適性、	柔軟性、	先進性	
C	機動性、	快適性、	近代性	
D	利便性、	機動性、	柔軟性	
E	公共性、	先進性、	利便性	
イ				
A	後進性、	排他性、	集団性	
B	厳格性、	硬直性、	安定性	
C	排他性、	厳格性、	硬直性	
D	共同性、	排他性、	安定性	
E	後進性、	安定性、	集団性	

〔問四〕傍線(6)に「道切りや結界封じ」とあるが、その目的や意図をもっともよく表している表現をA～Eの中から選び、符号で答えなさい。

- A ゴミや排泄物はいせつぶつを処理する
- B 争いが激しくなる前に移動する
- C 祭りなどの仕掛けを凝らす
- D 内と外を峻別しゅんべつする
- E 群れを解体する

〔問五〕次のア～オのうち、本文の筆者の考え方と合致しているものはA、合致していないものはBの符号で答えなさい。

- ア 移動や漂泊が進行するにつれて、社会関係や権力のあり方など、定住型の暮らしが生み出してきた社会の様々な仕組みが問い直されている。
- イ 定住と遊動の二元論では描ききれない社会の変容を前にして、遊動と定住を融合する新たな定住社会のあり方を模索することが求められている。
- ウ 定住社会の中でムラの住人が遊動の暮らしを進めるにつれて、ムラは争いごとや死への対面を余儀なくされるストレスから解放されていった。
- エ 農業革命と産業革命は定住型社会の中から生まれそれを確固たるものにしてきたが、情報革命は地理的な境界を越えるために、定住の暮らしを動揺させている。
- オ 紛争の解決方法をはじめとする現代社会での他者との関係のあり方は、一万年前の人類史上の革命という歴史の産物であり、永遠に不変とはいえない。